世界遺産化の会 http://88henro.org/

ガママを言って上京したが、知り合いば



地域みんなでの植樹活動

けだ。 らない、「東京砂漠」の暗黙のルールを前 ない、接点のない他人にはなるべく関わ に私は立ちすくんだ。「田舎は嫌だ」とワ じアパートの住人でも顔も名前もわから た。都会ではそれが当たり前なのだ。同 ある。上京したその日にアパートの隣人 んだのが、私の「地域づくり」のきっか に挨拶に行き、いきなり総スカンをくっ 私はいわゆる「田舎」の石川県出身で 大学入学を期に「ふるさと」を懐かし

るさと」感覚は必須であり、私は「修行 てのお坊さん。 る。ありがたいことに、どこへ行っても もや誰も知らない土地でのスタートで 渡り、何と今やお坊さんとなった。また 京にも根を張っていた私は、サラリーマ 名目で熱心に「ふるさと」づくりに励む れる。よくよく考えると地域の方々あっ あったが、今も地域づくりに参加してい ン勤めを経て、ひょんなご縁から四国に 「若坊さんが偉いね」とチヤホヤしてく 様々な活動を経て、その後すつかり東 地域に根付く為には「ふ

ホッとできる居心地のよい「地元」を思 い出した。

りが多い、頼りになる「ふるさと」感を できたが、それでも世代隔てなく顔見知 ればいいじゃないかと考えた。人見知り 東京でも感じたかった。 をしない私は、すぐにたくさんの友人が それなら、東京でも「ふるさと」を創

なりつつある。

かりでプライバシー無しでも、どこでも

まだ4年であるが立派な「ふるさと」に のように可愛がってくれ、こちらへ来て ことができる。地元のお年寄りは私を孫

ある。 り」という「ふるさとづくり」に励むので 自分のために今日もせっせと「地域づく と簡単に考えてしまう。 戻れない哀愁よりも「それならここで」 悲しくうたうもの」と続くが、私の場合で もわかる。犀星の詩はその後、「そして かる、という心境であろう、痛いほど私 思うもの」、離れてみて初めて良さがわ 残している。「ふるさとは遠きにありて が、同郷の詩人・室生犀星がこんな詩を 最後に、私と列記するのも恐れ多 かくして、私は



いくし、「「不会のな